

〈 書評論文 〉

「移民コミュニティ」の可能性と困難をどう捉えるか

— 離散するペルー人移民を事例に —

Paerregaard, Karsten

Peruvians Dispersed: A Global Ethnography of Migration.

(Lexington Books, 2008)

稲津 秀樹

1. 本書の背景・目的・手法

本書は、社会的な排除と包摂の権力にさらされる中での、移民の実践が持つ可能性と困難について、ペルー人移民を事例にして、人類学の立場からアプローチした著作である。

著者のカールステン・パエレガードは、コペンハーゲン大学人類学部の准教授の職に就いており、これまで英語、スペイン語、デンマーク語で著作・論文を発表している。いずれも一貫して、ワールドとしてのペルー、調査対象としてのペルー人に焦点を定め、地方と都市とをつなぐネットワークの在り方を明らかにしてきた。その後、国内でのネットワークが引き続きアメリカでどのように展開しているのかに焦点を移して、さらなる研究を続けている。それらの蓄積に立った上で、本書は、社会からの排除・包摂にさらされつつ「離散した (dispersed)」ペルー人たちの、グローバルネットワークの実践とそれを支える意識の両面をエスノグラフィーの手法によって明らかにしようとした意欲作である。

2006年の段階で、ペルー人移民は250万人以上と推計されており、総人口2600万人のうち、約10%の国民が海外に住んでいることになる。だが、ペルーは、最初から移民の送り出し国であったわけではなく、日本からの日系人移民の受け入れが示すように、海外から人びとが移住してくる国であった。ペルーからの移民の送り出しが顕著になりはじめたのは、南米での経済危機と治安の悪化が本格化し始めた1980年代～1990年代にかけてである。例えば、1980年には50万人程度だったペルーからの移民人口は、1992年には100万人を越え、4年後の1996年には150万人を突破しており、年々、拡大を続けている。一方の受け入れ国側では、労働市場の自由化と国家の移民政策の変容が、ペルーからの移民を受け入れる土壌を作り上げている。

こうした送り出し—受け入れ両国にまたがる世界を生きているペルー人移民にアプローチしていくために、著者は、ジョルジョ・アガンベンの「排他的包摂 (exclusive inclusion)」・「包摂的排除 (inclusive exclusion)」の概念 (アガンベン 2007) を、移住先・送り出し先のペルー人の状況に援用

しつつ、本書の目的を以下のように述べている。

ペルー人たちが、まずペルーでの正当な権利行使を阻害されている排除的包摂から脱し、その後、受け入れ国での社会的上昇移動を阻まれる包摂的排除を乗り越えていくためのネットワークや戦略をどのように設計しているのかを調査するために、彼らが定住した新しい土地と、彼らの出身であるペルーとの間に打ち立てられた紐帯や結びつきを明らかにしていく (p. 5、以下、訳文は評者による)。

こうした問いに答えていくために、彼は、ペルー人の送り出し先であるペルーは元より、アメリカ、カナダ、日本、スペイン、アルゼンチン、チリといった受け入れ側の国々も数多く訪れており、そこでの調査をエスノグラフィーの形でまとめる手法をとっている。このように国家間をまたいだ移民の現状を把握するために、一国家の一地点だけにとどまらず複数地を選んで調査を行う場合、近年の傾向として採用されるのは、「マルチサイトッド・エスノグラフィー (multi-sited ethnography)」と呼ばれる手法である¹。その手法によって目指されていたのは、全体的な世界把握のための記述ではなく、むしろ、非連続的でありながらも、個別かつ複数の対象を取り上げていくことで、それら一つ一つのエスノグラフィーが、世界を把握するために必要不可欠な記述とされていた点が特徴的であった (Marcus 1995)。

こうした先行議論を踏まえつつも、バエレガードは、「より綿密な調査のために選定された特定の調査地の範囲に限定されることなく、我々も調査地の定義を延長していくべきである。そして、私たちのフィールドも、ネットワークを広げ、場所の概念を形成していく移民と同じ方法で、形作っていくべきなのである」(p. 22) と説く。このように彼も複数地調査にこだわっているものの、個別の土地にそれぞれ生きる人々が、非連続的に把握されることには、批判を投げかけている。

そこで彼が提唱するのは、「延長されたフィールド (extended field)」という独自の方法的概念である (この概念名は序章としての第1章の副題にも掲げられている)。上にも記したように、この背景にあるのは、彼のペルーでの地方一都市間のネットワーク調査である。

けれども、ディアスポラ的な研究の調査地を、「マルチサイトッドなフィールド」として想定する際、私 [評者注：原著者を指す] は、その代わりに「延長されたフィールド」という言葉を用いたいと考えている。これは、単純に、いくつかの単一の土地での調査に基づいたエスノグラフィーを寄せ集めたものというより、むしろ、多くの異なる土地における移民生活の特定の側面 (移動、ネットワーク、生活、アイデンティティ、組織、集合行為) について、束の間ながらも深い研究の数々を、重ね合わせること [interlocking] によって構築されるものである (p. 22)。

つまり、移民のトランスナショナルな実践やディアスポラ的な意識を調査していくためには、マルチサイトッド・エスノグラフィーが陥りがちな、各々の調査地で閉じてしまった単発のエスノグラ

1 この主張の背景には1960年代末から続く、人類学への批判を念頭に置いておかねばならない。特に、クリフォードとマーカスの論集『文化を書く』によって、1980年代後半から巻き起こった「ライティング・カルチャー」ショックというべき状況への対案として提案されたのが、「マルチサイトッド・エスノグラフィー」の手法であった。こうした現代人類学の危機とその乗り越え方の模索について、詳しくは松田の論考を参照 (松田 2009: 序論)。

フィーを並べるだけではない方法論が必要だと著者は主張している。言い換えると、移民の生活をめぐって具体的な調査地に立脚すると同時に、各々の調査地を繋いだところに成立している、ある共通した側面を描いていくことが肝要だということである。よって、調査地ごとに当事者を「非連続」に記述してきたマルチサイトド・エスノグラフィーではなく、むしろ、エクステンデッド・エスノグラフィーは、複数の調査地のあいだに埋もれてしまっていた当事者に関する事実を記述していくことを志向していると言えるだろう。

こうした手法を用いつつ、送り出し先と受け入れ先での包摂と排除、そして、その力関係の中でのペルー人移民の実践に焦点をあてている本書の場合、次の諸点を記述することが目指される。ひとつは、ペルー人移民自身の主観的な意味世界であり、もうひとつは、移住過程を支配する権力関係と政治的な力にかかわる広域な文脈である。さらには、後者に対する前者の対応としての、国境を越えたペルー人の（トランスナショナルな）実践や（ディアスポラ的な）意識である。

以上のような問題背景に基づく意識と手法を携えて、彼が実際に調査した土地は、3年間で、世界8か国、10か所以上にのぼる。順を追っていくと、1997年に、スペインのバルセロナに2か月、マドリッドに2週間滞在したのを皮切りに、1998年には、アメリカのマiami、ロサンゼルスに2か月ずつ、そしてベーターソンに2週間の調査を行った。日本には、1999年に群馬県伊勢崎町を中心に1か月滞在し、翌、2000年には、アルゼンチンのブエノスアイレスに同じく1か月間の調査を行ったという。他にも、1999年から2005年までにかけて、トロント（カナダ）、ミラノ（イタリア）、サンティアゴ（チリ）、そしてペルーに向けて短期旅行を行ってきたという。

2. 本書の構成

次に、本書の構成を簡単に要約しておきたい。

本書は、まず、第1章「イントロダクション—延長されたフィールド—」において、前節に述べたような、ペルー人移民の現状や、現状への問題意識、問題設定、そして調査上の手法について詳細な説明が加えられている。加えて、特徴的なのは、第1章の各節の冒頭には、必ずしも本文の文脈とは関係のない、著者のフィールドノーツからの記述が盛り込まれていることである。それらの記述内容の舞台となっている場所は、ロサンゼルス自動車工場、バルセロナのレストラン、マドリッドの公園、日本のカラオケ店、といった具合で、それらを読むだけでも、いかに彼がペルー人という存在を追いかけながら、世界を駆け巡っていたのが垣間見られるものとなっていて興味深い。

第2章から第9章までは全3部に分かれている。

第2章と第3章は、「流れと文脈」と題された第1部にまとめられている。第2章では、移民を受け入れ、送り出してきたペルーの20世紀に関する歴史的な文脈が述べられ、移民の潜在的な行く先を決定するものとしての南北間の地理的ヒエラルキーに関する議論が展開される。そして、第3章では、ペルーからの移民を受け入れている国々の移民政策の歴史が述べられている。周知のように、移民政策は、国境ゲートにおいて不審者である移民を「合法」か「不法」かのコードへと分別する機能を担っている。

では、国家によって「合法」ないしは「不法」とされてしまう移民は、いかなる生活・生存戦略を取っているのか。第4章・第5章・第6章からなる第2部は、そうしたペルー人の人々の「ネットワークと過程」に光が当てられている。第4章では、具体的にアメリカ、スペイン、アルゼンチン、

そして日本から、ペルーまでをつなぐ移民ネットワークの形成を描き出す。その中で彼は、移民は権力構造に完全にコントロールされるわけではなく、むしろ、移民にとって、ネットワークが常に権力と対峙していくための重要な紐帯としてあることを指摘する。そして、第5章では、ペルー人のトランスナショナルな実践への参加を促すイベントや、その過程、諸組織の活動などが描き出される。第6章では、とりわけカトリック組織の内部において、ペルーで信仰の対象となっていた聖像が変化し、移住先で別の新しい聖像のあり方を論争しながら創造する側面と、それに伴う成員の分裂のあり様が記述されている。

第7章・第8章・第9章（結論）からなる第3部は、「カテゴリーと移民の軌跡」と題されている。第7章では、民族的・社会階層的に異なる背景をもっているペルー人をカテゴリー別に12名、それぞれに聞き取りを重ねていく。それらを通じて、全員が何かしらの形で有していた、共通の国家起源や家族の観念が、移民前の社会的地位や移民後の経験などで、変化していく様子が示される。第8章では、「不法性」がもっている意味と、不法な旅が、移民個人の今後の生にどのような影響を与えるのかについての議論がなされる。これらの分析が収斂するのは、送り出し国での民族的・社会階層的な分断が、そのまま、受け入れ国での移民コミュニティの分裂に影響しているという点である。以下、本書の結論を詳しく見ていこう。

3. 議 論

全271ページもある本書をどう読むかは、論者によって議論の分かれるところであろう。さしあたり本稿では、本書の「結論」をどのように解釈するのかに焦点を絞りたいと思う。そこで、評者なりに「結論」を要約した上で、いくつかの論点について議論したい。

本書の実質的な結論は、第9章「結論—希望と絶望の間で—」にて示されている。そこでは、ペルー人のトランスナショナルな実践とディアスポラの意識のあり方で、どういった事例が発見できたかがまとめられる。その後、パエレガードは次のように述べる。

これらの観察が示唆しているのは、ペルー人のトランスナショナルかつディアスポラ的な関係については、多くの困難が伴っていること。そして、宗教的活動と同様に、経済的、社会的、政治的活動が含まれていることである。こうした中で、最も目立っていたのは、ペルーの食料品や飲料水を扱っている企業の社長や取引者たちによる、経済的なネットワークであり、ペルー人が定着している主要都市で開業している送金業者であり、50都市以上で移民がつくりあげている宗教的な兄弟愛であり、移民がアメリカとカナダで形成してきた保護組織であった。どの場合も、2カ国にまたがった地方の移民組織の多くを、接触させることを目的にしているのである。しかしながら、活動の規模と盛り上がりの点からみると、それらは〔評者注：先行研究で明らかにされてきたカリビアンやメキシカンといった人々とは異なり〕相対的に、低いものであると言わざるを得ない。言い換えれば、ペルー人移民は、これまで、トランスナショナル的に、もしくはディアスポラ的に強いかかわりを築けてきていなかったのである（p. 232）。

パエレガードによれば、こうしたトランスナショナルないしはディアスポラ的なつながりの希薄さは、ペルー人同士での分裂も相まって、受け入れ国での法律や経済状況へと適応（adaptation）していくことを促進しているという。こうした中で、ペルー人移民は、受け入れ国で成功する希望が持て

る者と、成功に向けて前進していく（*make progreso*）ことに絶望した者に引き裂かれている状況が生じているという。

こうした結論が導かれていることを、どのように解釈すればいいのだろうか。結論部分が指し示す学説史上の位置づけについて、著者自身は詳しく言及していないため、読者の判断に委ねられているところがある。評者としては、調査論の視点にたった場合と、トランスナショナリズム論の視点にたった場合の評価が考えられる。最後に、これらの2つの視点からみた本書結論が秘めている可能性を、パエレガードの調査の中心となった「移民コミュニティ」に焦点を合わせながら、発展的に論じてみたい。

3-1. 「延長されたフィールド（extended field）」概念の可能性と困難

まずは、調査論の視点にたった場合の評価についてである。本論で採用された方法論は、前述のように、調査地ごとの現実を記述していく「マルチサイトッド・エスノグラフィー」に対して、調査地のあいだにある現実を「延長されたフィールド」概念によって記述するエスノグラフィーであった。

このように「マルチサイトッド・エスノグラフィー」と「エクステンデッド・エスノグラフィー」を紹介した場合、両者は大きく二分法的に区分されている印象を与えるが、実はそうではない。パエレガードが「延長されたフィールド」概念を導入することで目指しているのは、マーカスが提示した前者の方法論を、トランスナショナリズムあるいはディアスポラ的な観点をベースにしつつ、移民研究を行う際の発展形としてよりよいものに整備するためである。それは、「マルチサイトッド」という言葉では必ずしも捉えきれていない、国境を越えた複数の場所同士、あるいはコミュニティ同士のローカリティに根ざした、移民の意識あるいは実践を捉えていくために他ならない。

マーカスの概念であるマルチサイトッド性（*multi-sitedness*）は、世界の異なった地点から調査地が選定されていることを正確に言い表しており、さらに、非連続かつ分裂した調査地の概念を引き起こしている。だが同時に、グローバル移民のディアスポラ的なアイデンティティに埋め込まれつつ構築される帰属意識や伝達されるローカリティの意味を、どのように記述するのかという点においては、やや的確ではない（p. 21）。

延長されたフィールドの概念は、単にグローバルネットワークの中の移民コミュニティを分析する重要性を強調するためだけではない。むしろ、ディアスポラ集団が、特定の場所、特定の時間に基礎を置いていることを明らかにし、更には、それにより、移民が帰属したり、相互に作用したりしている世界の形式と同様に、古いアイデンティティを作りかえ、新しいアイデンティティを創造する側面を認識するためである（p. 22、傍点は評者による）。

以上の引用部分から、パエレガードが、マーカスが提示した「マルチサイトッド性」を踏まえつつも、「延長された（*extended*）」という表現を用いることで、その乗り越えを志向していることが分かる。とりわけ、国境を越えながら成立している移民の実践や意識を、脱領域的な空間としてではなく、具体的な場所・時間に足場を置いたローカリティ、あるいは移民コミュニティとの関わりから捉えていくという試みは、次項で述べるトランスナショナリズムに対する部分的批判（Faist 2000: 218）を乗り越えるための具体的な方法論としても、重要な意義があると考えられる。

このように、エクステンデッド・エスノグラフィーが、現代の移民の実践・意識を捉えるための可能性を内包しつつも、一方で、グローバル規模でのエスノグラフィーそのものを一人の著者が実行することに、多くの困難や問題が伴う部分もあるだろう。それは、著者が述べるように、調査資金の面でも、調査地選択の面でも限界があるという点に関してもそうであるが、評者としては、限られた調査期間中に、どれほど深く、多面的な聞き取りが可能であるのかについて、疑問が残るものであった。特に、前述のように、包摂と排除の権力にさらされてある移民の生き抜き戦略を探る、とした本書の目的に鑑みた場合、「移民コミュニティ」にのみ焦点を当てた調査方法で本当によかったのか、疑問が残るところであった。

実際に、彼が「移民コミュニティ」を調査するために行った方法とは、次のようなものだった。すなわち、コミュニティをリストアップした上で、それらの実践を国家ごと、都市ごとにマッピングする。その後、実際にコミュニティリーダー（新聞編集者、文化・地域・宗教団体のリーダー、領事館職員、商業団体の代表など）や移民個人の生活誌を収集するというものである（p. 14）。このようにコミュニティを中心とした聞き取りを展開していくことで、彼自身が述べていた民族的ないしは社会階層に起因する不和によって、コミュニティから外れたところで生活しているペルー人にアプローチしていくことを、最初から度外視していたのではないだろうか。受け入れ社会のみならず、自身が属する集団からの二重の排除を経験した移民の存在は、権力との関係を考えていく上で、より深刻な問題として浮上するのではないだろうか。

具体的な場所、あるいはコミュニティから外れたところで生活する移民の存在を喚起することは、彼の議論に対する外在的な批判との指摘を免れ得ないかもしれない。しかし、評者は、上のような二重の排除を経験している移民に着目することで、「延長されたフィールド」概念で捉えられる移民の範囲を限定していくことができると考える。これは言い換えれば、次のような問いとなる。すなわち、出身国から「延長されて」いない場所と時間に「非連続的」に存在している、移民の生活実践や意識の問題は、パエレガードの方法論の中では、どのように取り扱うべきであろうか。

この問いを具体的に考えていくには、例えば、日本における在日コリアンの存在を挙げると、わかりやすい。朝鮮半島が日本に植民地として編入された歴史から100年の月日が流れようとしている現在、「在日」は、今や4世あるいは5世の時代を迎え、日本人との通婚も進んでいると言われる。在日コミュニティによる民族学校の開校や、多文化教育の中での民族祭りのような取組みがある一方で、彼ら彼女らの生活実践や意識の上での「コリアン」は、限りなく、朝鮮半島から「延長された」ものではなくなくなってきていると言える（むしろ、多文化教育や民族祭りの現場に携わる人々は、そうした状況が当たり前となっていることに「危機感」を抱いている）。例えば、川端は、中心市街地開発と郊外化が進んだ地域で生活を送る在日コリアンの若者への聞き取りを通じて、エスニック集団から離れて暮らすことが、「在日」に対するスティグマや差別からの「解放」であると同時に、彼ら彼女らの帰属意識が、個人の「主体性」に任されてある現実を描いている（川端 近刊）。

このように送り出し国家から「延長されていない」場所と時間を生きている移民の生について考える際に、パエレガードの提示した「延長されたフィールド」概念は、どこまで答えられるのだろうか。あるいは、調査対象にしようとするエスニシティの状況を見定めた上で、マーカスが提示した「マルチサイテッド・エスノグラフィー」との二者択一、あるいは2つの手法の組み合わせが模索されるべきなのか。このように「延長されたフィールド」概念が指し示す可能性と限界については、パエレガードの今後の調査のみならず、日本におけるエスニシティの事例研究においても、引き続き検

討されるべき点であろう。それは、次項で述べる「トランスナショナリズム」をどのように捉えるか、という問いを抜きにしては考えられない論点である。

3-2. 「トランスナショナリズム」あるいは「トランスナショナル・コミュニティ」の可能性と困難

前節では、マークスの「マルチサイトッド・エスノグラフィー」と、パエレガードの「エクステンデッド・エスノグラフィー」の相違を、移民の実践と意識を描く際に、それらが超国境的な場所あるいはコミュニティに基礎をおきつつも、「連続的」に展開しているものとして捉えるかどうか、という点にあることを述べてきた。このように、国境をまたいだ生活世界を生きる移民を捉えるための概念枠組みとして、近年、注目されているのが、「トランスナショナリズム」、あるいは「トランスナショナル・コミュニティ」をめぐる議論である。本書で提出された結論も、この議論の中に位置づけることができる。

パエレガードの結論部に関する議論に入る前に、トランスナショナリズム論を巡る概略を述べておく必要があるだろう。トランスナショナリズムについては、アメリカの移民研究における議論の高まりと共に、その定義は錯綜状態にあると言える。ここでは、「コミュニティ」概念と結び付けられた形で定義されるものを紹介しておく。

例えば、Portesらは、移民の国家間を越境する活動が一時的ではなく、恒常的に行われることにより、受け入れ国と送り出し国を繋いでいる、「トランスナショナル・コミュニティ」が生じていることを指摘した上で、次のように述べる。「このようなフィールド（トランスナショナル・コミュニティ）で、二重の生活（dual lives）を送る人の数が増え続けている。そこは、2か国語を話し、2か国に故郷を持ち、国境を越えた定期的なコンタクトを続けながら生計を立てている人々から構成されている」（Portes 他 1999:217）。このように定義づけされる「フィールド」は、トランスナショナルな場、ないしは空間（Transnational Social Field/Space）と呼ばれる。上の定義からも明らかのように、受け入れ国と送り出し国にまたがった2つの社会を1つの場ないしは空間とみる「フィールド」の発見は、同化論（ゴードン 2000）に代表的な、受け入れ国に消えていく移民の姿に議論の幅を限定しない意味で、新たな地平を切り開いているものとされる。

こうしたトランスナショナリズムの諸影響は、小井土によれば、次の3点にまとめられる。すなわち、①移住先からの母国への送金や、企業家の活動に代表される経済的な影響、②移住先から母国の投票活動への関与を通じた政治的な影響、③受け入れ国と送り出し国双方にまたがる独自のアイデンティティ形成に生じる社会・文化的な影響の3点である（小井土 2005:385-387）。このように、既存の国民国家の枠組みを超える社会空間の形成とコミュニティ実践の可能性の多面的な側面に着目しようとするトランスナショナリズム論だが、同時に様々な疑問が提出されている。

例えば、現代のコミュニティ概念を検討したデランティは、「トランスナショナル・コミュニティは、伝統的なローカル・コミュニティよりは開かれた帰属の言説であるが、単一の世界コミュニティよりも強烈的な閉鎖的感覚をもっている」（デランティ 2006:231）と指摘する。こうした性格を有する移民コミュニティは、パウマンが警告するように、その実態としてはともかく、「安全」を追求する社会からは、危険な「ゲットー」としてまなざされる危険性が常に付きまとっている（パウマン 2008）。

このような状況は、日本におけるペルー人をはじめとした日系南米人の生活世界をめぐる議論にも

当てはまる。特に地域社会に焦点を当てた研究の場合、日系人独自のエスニック・ビジネスや学校といった機構が作られていくことで、一部住民を除いた日本人の人々と彼ら彼女らの関係は大きく「セグリゲート」化していると捉えられてきた（小内・酒井編 2001）。両者の相克が最も先鋭化するのが団地という空間である。そこでは両者の「共生」が模索されつつも、次第に、日系人たちは自治上の「問題」をもたらす集団として地域住民から捉えられていくことになる（都築 1998, 2004, 2006）。こうした主流社会からのまなごしを回避しつつ、「ゲッター」化しない「コミュニティ」を現実的にどうやって構築していくのかという問題もあるが（吉富 2008）、そうした現場の人々の実践や意識をどのように捉えるか、という点において、「トランスナショナル・コミュニティ」の概念を導入しているのが、以下の広田の議論である。

彼は、1990年代～2000年代を通じて多く来日したペルー人をはじめとした日系人移民の生活世界の調査結果を、トランスナショナリズム論を援用しつつ、モノグラフとして発表している。そこでは、日系人を中心に据えつつ、「越境者—エスニシティ」としての移民の共同性と、彼ら彼女らとビジネスや日本語教室の場などで日常的な関係を持ち「共振」している様々な日本人が織りなす多様な「生き方」に基づくネットワークが明らかにされている。中でも特徴的なのは、「越境者—エスニシティ」と「共振者」の両者が「共存」を模索しつつ、既存社会からの圧力を迂回するだけではなく、場合によっては、既存社会の在り方をも変容させていく関係性のことを、「トランスナショナル・コミュニティ」として位置付けている点である（広田 2003）。

広田の著作に代表的なトランスナショナリズムを背景にしたエスノグラフィーは、通常、移民が国家や主流社会からの権力を乗り越える実践を肯定的に記述することを、その旨としてきた。こうした議論に対し、彼ら彼女らの「生き方」に焦点を合わせた議論は、二重労働市場における労働者としての日系人の位置づけがなされていないこと（大久保 2005）に加え、エスニック・ビジネスが社会的上昇を果たせる程の資本を蓄積しにくい点を考慮に入れていない「氷山の上」の議論ではないか（梶田・丹野・樋口 2005）といった、労働面・資本面に分析の重きを置いた立場からの批判がその後相次いだ。しかし、これらの批判に対し、広田は「移民コミュニティ」の重要性が高まる昨今にあって、人々の「共生」を考えていく上で引き続き、「越境者—エスニシティ」と「共振者」との関係を見ていくことの必要性を強調している（広田 2006）。

その必要性とは、上にも述べてきたように、既存の制度的社会からの圧力にさらされ、「セグリゲート」化しているとされる現状を乗り越えるために、受け入れ社会の人々との関係構築を行いつつ、移民としての主体的な「生き方」を模索することにある。こうした側面を把握していくことは確かに重要ではあるが、一方で「移民コミュニティ」あるいは「トランスナショナル・コミュニティ」の現実、そのように「希望」としてのみ一枚岩的に捉えられるものなのであろうか、という疑問も残る。まさに、この点において、パエレガードが結論部で示したように、「トランスナショナリズム」に含まれる「希望」のみならず、その「絶望」の部分にも向き合うことが重要になってくる。

例えば、これまでのトランスナショナリズムをめぐる批判でも、分析者の側が、トランスナショナルな枠組みに固執する余り、越境活動の肯定的な側面ばかりに着目することにより、国家の法制度・移民政策から移民が制限を受けている側面を軽視している点が指摘されている（Waldinger and Fitzgerald 2004）。こうした批判は、移民の時代におけるナショナルなもの暴力を問い直すうえで非常に重要ではあるが、コミュニティに外在的な批判となっている側面があるのは否めない。むしろ、現在のトランスナショナリズム論において重要になってくるのは、「移民コミュニティ」あるいは

「トランスナショナル・コミュニティ」に内在し、かつ、生産的な批判である。

こうした議論を踏まえた上で、本書で最も注目すべきことは、パエレガードの結論部の主張が、他ならぬペルー人の「移民コミュニティ」の調査結果から導き出されていることである。ここで、彼の結論をもう一度振り返ってみると、それは以下の2点にまとめられる。第1に、移民がトランスナショナルな実践を行う中で、メンバー間に不和が生じ、ディアスポラ的な意識が確かめにくい状況ができてきていること、第2に、そうしたメンバー間のつながりの希薄さが、コミュニティの分裂を生み、受け入れ国への適応に希望を抱くものと、絶望する者との間に大きな差を生みだしていることである。こうした彼の議論から、今後の「トランスナショナリズム」あるいは「トランスナショナル・コミュニティ」を考えていく上において、以下の点が示唆されていると言える。それはすなわち、超国境的な「移民コミュニティ」を可能性として一枚岩的に捉えることなく、その内部の分裂に伴って生じている成員の多様性を決して無視してはならないということである。

トランスナショナルなものを手放しに賛美することなく、しかし、同時に軽視することもなく、排除と包摂の権力にさらされる移民の生き抜き戦略をいかにして描いていくことができるのか。本書が提出したペルー人移民の実像をめぐる議論は、グローバル化する移民と権力の関係をめぐる社会学・人類学を構想していく上で、今後、重要な手がかりを提供していくことになるだろう。

参考文献

- アガンベン、ジョルジョ、(高桑和巳訳) 2007『ホモ・サケルー主権権力と剥き出しの生』以文社。
- バウマン、ジークムント、(奥井智之訳) 2008『コミュニティ—安全と自由の戦場』筑摩書房。
- デランティ、ジェラード、(山之内靖・伊藤茂訳) 2006『コミュニティ—グローバル化と社会理論の変容』NTT出版。
- Faist, Thomas, 2000, "Transnationalization in international migration: implications for the study of citizenship and culture", *Ethnic and Racial Studies*, 23(2): 189-222.
- ゴードン、ミルトン、(倉田和四生・山本剛郎訳編) 2000『アメリカンライフにおける同化理論の諸相—人種・宗教および出身国の役割』晃洋書房。
- 広田康生、2003『新版 エスニシティと都市』有信堂。
- 、2006「研究動向：分野別研究動向（移民研究）」〈共生〉をめぐる秩序構造研究に向けて』『社会学評論』57(3): 650-660。
- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人、2005『顔の見えない定住化—日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会。
- 川端浩平、近刊「スティグマからの『解放』、『自由』による拘束—地方都市で生活する在日コリアンの若者の事例研究』『解放社会学研究』21。
- 小井土彰宏、2005「グローバル化と越境的社会空間の編成—移民研究におけるトランスナショナル視角の諸問題」『社会学評論』56(2): 381-399。
- 松田素二、2009『日常人類学宣言！—生活世界の深層へ／から』世界思想社。
- Marcus, George, 1995, "Ethnography in/of the World System: The Emergence of Multi-sited Ethnography", Marcus, George, 1998, *Ethnography through Thick & Thin*, United Kingdom: Princeton University Press, 79-104.
- 小内透・酒井恵真編、2001『日系ブラジル人の定住化と地域社会』御茶の水書房。
- 大久保武、2005『日系人の労働市場とエスニシティ』御茶ノ水書房。
- Portes, Alejandro, Luis E. Guarnizo and Patricia Landolt, 1999, "The study of transnationalism: pitfalls and promise of an emergent research field", *Ethnic and Racial Studies*, 22(2): 217-237.
- 都築くるみ、1998「エスニック・コミュニティ形成と『共生』」、『日本都市社会学会年報』16: 89-102。
- 、2004「外国人集住都市の現実から」、『市民政策』36: 44-50。
- 、2006「外国人と多文化共生」、玉野和志・三木松政之編、『地域社会学講座3 地域社会の政策とガ

バランス』東信堂、119-132。

Waldinger, Roger and Fitzgerald, David, 2004, "Transnationalism in Question", *American Journal of Sociology*, 109 (5): 1177-1195.

吉富志津代、2008『多文化共生社会と外国人コミュニティのカーゲットー化しない自助組織は存在するか?』現代人文社。

(いなづ・ひでき 博士課程後期課程)